



小池 光選

小六が「秋らしいねえ、爺ちゃん」と空を見上げてぼり泣く
熊谷市 間中 昭

【評】なんとも老成した小学六年生だが、こどもはものほずみにこんなことをいうもので、そこがおもしろい。お爺ちゃんと孫、並んでふと秋晴れの空を見上げる景。目の見えぬ祖父にアリスを上げてたくて走りに行った小六の夏
三原市 岡 美代子

【評】こちらは小六の思い出。目が不自由になったお爺ちゃんが大好きだった。アリスを食べさせてあげようと炎天下を走る、走る。祖父の喜んだ顔が見えるようである。
町田市 岩本 房子

【評】老化というのは驚くべきもので、どんな面相が変わる。嘆かず「お化けちゃん」と自分に呼びかけるところがいい。
新座市 田中 美登

図書館の書架の狭間を歩みつづくと残生を思う時あり
秩父市 高橋 秀文

外国語のとび交う旅より帰る古きわが家に虫の音を聴く
浜松市 秋原 容子

昭和には「フランシヌ」の歌ありて若者達は肩を組みたり
狭山市 奥蘭 道昭

鳥や花子らに手をふる散歩道みんな好きよとつづやきながら
東京都 榎本 セツ

ともだちとの誤解がとけて身がかるく真夜中なのに帷巾がけする
仙台市 江川 森歩

幼き日夕方五時が好きな機織り終えて帰る
川越市 大貫 芳江

栗木 京子選

朝露を硯に落とし墨磨つて女房のやうに綴るかな文字
横浜市 岡 まゆみ

【評】この歌の「女房」は宮中の官女や貴族の侍女。平安時代の紫式部や清少納言の姿が目につかぶ。かな文字の発達によって女性の文学者が次々に誕生した。上旬が優雅。カワセミは「飛ぶ宝石」だが動かないカメラで狙う今日は二時間
神戸市 堀井 俊則

【評】羽を広げて飛ぶ姿が宝石のように美しいカワセミ。だが、なかなか動かない。撮影者にとっても不動の二時間が過ぎる。「今日は」に日々の作者の熱中ぶりが見える。
東京都 後藤 和子

【評】メモ書きと短歌の間に線を引いたところに毅然とした姿勢が感じられる。「うたらしきもの」の控え目な表現がやさしい。
尼崎市 十河 清

夕方の宝塚ゆき路線バス下車する折に「家まで無事にと」
山口県 松田 修三

生検の結果を聞きてメールするガン細胞なし今すぐ帰る
神奈川 鈴木 栄子

陽の匂ひたつぷり含み小判草黄金の色の風を靡かす
白狐の面松明に揺れ笛に揺れ秋の祭りは郷愁さそふ
船橋市 中島 紺

収穫を終へし胡瓜のネットへと絡まる夕日束の間に暮る
福島県 服部 啓一

水底を流るる水にしずもれる砂の時間のほの光りあり
垂水市 岩元 秀人

朝刊の冷んやり届く十月のポストの奥のニホンミツバチ
岩倉市 夫馬 和子

俵 万智選

リハビリの中にひばりが棲まうこと祈りのかたち羽を持つこと
東京都 無地ムジカ

【評】「リハビリ」という文字の並びに「ヒバリ」を見出した。濁点が移動しているところも鳥っぽい。おそろくリハビリが日常にある人なのだろう。ひばりからの連想で広がる下の句が、切実で美しい。
大野城市 野分 のわ

【評】「あの日」を思い出しながら、スーパを混せているのだろう。その仕草が、時計の針を巻き戻したい気持ちとくまなく重なった。次はなにを見せようとするの。ドレッシングを振らずに付けてきた性格で 加古川市 石村 まい

【評】分離したままドレッシングをかける…性格を表す具体例として、意表をつきつつ的確だ。そのアバウトさに期待が高まる。
東京都 武藤 義哉

バス停にバス待ちおればひとひらの秋系統の雲が過ぎゆく
高島市 宮園佳代美

地球からパンチを浴びる感覚でこぼこ道を進む自転車
高島市 宮園佳代美

死神がチョコでわたしがグーを出すそんな感じ
鹿兒島市 松本 清展

で戻ったこの世
大和郡山市 本田 岳

通知が赤い
山形市 柏屋 敏秋

光消え遠花火には告白の間合いのような空白がある
東京 石井 しい

日帰りで行けなくはない海だけどどう行かないと決めている海
東京都 石井 しい

朝の歯みがき
伊勢市 藤田ゆきまち

黒瀬 珂瀾選

秋の夜の静けさふかし風の音ふくろうのこえ再発告知
宮崎市 木許 裕夫

【評】一気に寒くなつて、静寂が身に沁みる秋の夜。繰り返す耳に蘇るのは、がんの再発を告げる医師の声。季節の移ろいの中に、己の命を熱く思うのです。
宇治市 浜岡 学

白色度七十ほどの再生紙 頑張り過ぎない優しいさがある。
【評】再生紙なので、輝くような純白ではない。でも、それくらいの方が眼にも優しい印象がありますね。紙も人も、頑張り過ぎない程度のゆとりがある方がいいのかも？
東京都 岡田さやか

秋風に吹かれとりどりのスポン干す二足歩行の四人家族の
【評】物干し竿に揺れるスポンが四本。その足の形それぞれに、家族の歩みを感じる。この計八本の足で、家族一緒に歩いていくのだ。潔癖なほどに真白き図書館の『おこりじょう』の読み聞かせ会
小諸市 藤 雪陽

運動会雨で流れてのんびりと今日は平日栗の皮剥く
富山市 中林美智子

亡き父のデイサービスの送迎車夕陽の中を右折してゆく
千葉市 佐藤 綾子

お婆ちゃん服うら返したと教えればなかに構わん裏も吾が物
木津川市 島野 秀子

「片手さえあれば参加できます」とジャンケン大会の無邪気な声は
神戸市 浅田 拓史

我が前をひらひら飛べる秋の蝶小さな川を越えることなく
北名古屋市 月城 龍二

できぬことをできると判断されており見ているだけでやらない人に
大和郡山市 大津 穂波

次回は11日(火) 掲載予定

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。
◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌(俳)壇、〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから 右の影絵はぶんかくんしょう